

特別支援だより No.17

令和3年8月30日（月）

特別支援教育コーディネーター 松田敦子

③ 「聞く」ことは、見ること



我が国の場合、就学前や入学当初に仕つけ的な指導に多くの時間が費やされます。例えば、先生の目を見ながら話を聞くことや、手を膝の上に乗せてよい姿勢をとることなどです。これは、子どもが先生の姿を常に追う「常視率」を高めることに役立ちます。

そのため日本の場合、諸外国に比べて、先生を見る常視率が高いというのです。これは学習の理解を促進することに大いに役立っています。

でも、先生が話したあとに「先生いま何っていったの?」と聞き返すことが多い場合は、子どもをしかるのではなく、先生自身の話し方に問題がないか考えてみてください。「話すとき、互いに向き合っているだろうか」「要旨をまとめて話しているか」「自分自身は、子どもの言葉を真剣に聞こうとしているだろうか」というように反省材料になります。

「聞いていない」としかるだけではなく、話し方や聞き方の基本を押さえておくことが大切です。

低学年など、「話」だけでは心に届かない場合には、「見る」「書く」など五感を通した意識づけが必要です。黒板に絵をかく、短い文章にしてノートに書かせるなどが考えられます。

「これから三つのことを話すよ。一つ目は…。二つ目は…」と、何より相手意識をもって話すことが大切です。

このように「聞く」ということに着目していくと、話を聞かないのは、子どものせいだと他人転嫁してはいけません。先生自身の、子どもの話を聞くときの態度はどうなのかと見直しを図ることで、日常において、自分の態度を見直すことになります。

指導は、「聞く」ことから始まります。

Q9

体育の授業でよく起きることですが…

自閉症の子どもは、集団で行動することに困難があったり、身体的な障害はないのに運動ができなかったり、不器用だったりします。

自閉症の特性から考えてみましょう

- ④ 自閉症の子どもは、こだわりが強いため、体育の授業中にトラブルを起こすことがあります。例えば、勝敗に強いこだわりのある子どもが、ドッチボールなどの集団競技で負けるとパニックになったり、相手チームの子をたたくといった行動をしてしまうことがあります。
- ④ ゲームのルールがなかなか理解できないため、集団競技がうまくできないことがあります。例えば、サッカーでは自分のチームにシュートしてオウンゴールにしてしまう、野球ではヒットを打っても三塁側に走ってしまうといったことがあるかもしれません。
- ④ 触覚へのこだわりがあり、着替えができなかったりするために、「運動着の下にはシャツを着ない」などの健康・衛生上の理由から取り決められるルールに従えないことがあります。
- ④ また、自閉症の子どもの一部には、極端に不器用、動作模倣ができない（教師と向かい合って体操をすると左右が逆になってしまう、人の動作を大雑把にしか真似できない、など）、並ぶ位置や方向が分からないといった問題を持っていることがあります。これらは、空間の認知力や運動機能に困難があるために生ずるものです。

支援のヒント1 ● 自閉症児への指導例

小学校4年生の知的障害を伴う自閉症の女兒。体育の授業では、跳び箱やマット運動など個人の技能的なものはうまくいくのですが、ボールゲーム、鬼ごっこのようなルールのある運動は理解しにくいいため、集団から外れてしまうことがあります。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

- ① 集団活動で並ぶ場所に目印を置いたり、いつも同じ子どもの後ろに並ばせるなど、自分の位置が分かるような手立てを考える。
- ② ゲームのルールを覚えさせるには、本人の発達段階に応じ、本人が分かっているものを利用する。例えば、しっぽとりゲームで、取られたらいやだと思ふものをしっぽに結びつけてみるなど。
- ③ 教師や（介助役の）友だちが必ずついてルールを教える、ポートボールなどの球技ではコートチェンジを行わない、体操のモデルは教師が本人と同じ向きでやる、といった配慮をする。

支援のヒント2 ● 高機能自閉症・アスペルガー症候群の児童への指導例

小学校3年生のアスペルガー症候群の男児。勝敗への極端なこだわりがあり、短距離走で自分が一番になれないとわかると途中から走るのをやめてしまったり、自分のチームが負けると癇癪を起こし、床を蹴ったりすることがあります。このような場合、支援の方法としては以下のことが考えられます。

- ④ ゲームを始める前に、「ゲームでは負けることもある」ことを話し、負けた時にはどのような行動をすれば良いか教えておく。「失敗は成功の元」などの決まり文句を有効に活用すると、納得できることもある。
- ⑤ 一番になれなかった・勝てなかったことに強い抵抗を示す場合は、少しでも達成感・肯定感が感じられるようなゲームを設定することも配慮として考えておく。例えば、本人が鉄棒を得意としている場合は、1時間の体育の授業構成に鉄棒をする時間を設けるなどの配慮である。
- ⑥ パニックを起こしたときは、パニックが収まり、本人が落ち着いてから話しかけるようにする。状況を説明し、どうしたらよかったのかを振り返り、次に同じ状況になった時にどうすればいいか（選択肢を与えながら）考えることも必要。